

編集後記

第4号の外国人留学生指導センター紀要をお届けします。本年は(1995)3月の刊行以来わずか9カ月のスピード出版です。さて、1995年度はオウムで始まりオウムで暮れようとしている異常な年となってしまいました。実際、第3号が発刊された本年3月末以降の大事件として、オウムの事件以外に何が起こったのか思い出せないほどです。あれほどの犠牲者を出した1月の阪神・淡路大震災もどこかへ消えた感すらあります。一方、学内にあっては、昨年度から実施された全学教育体制が、将来の大きな変革を見据えつつもようやく軌道に乗り始めました。

当外国人留学生指導センターにおいても、1993年4月に着任したばかりの實平雅夫講師が1994年10月には転出し、その後任を決定しないまま新年度を迎えることとなりました。したがって、本年度は専任教官として鹿島英一助教授1人がセンターを切り盛りするという異常な事態となりました。これは流動定員の活用を伴った学内措置による「外国人留学生指導センター」の設置を、なんとか近い将来に省令化、もしくはその目途を立て有為の人材を得ようという深慮遠謀によったものであります。いずれにしても、年々増え続ける留学生に対してその教育に遅滞は許されず、鹿島助教授始めその他の講師の方々に多大な労苦を負わせることになってしまいました。また、この様な中で本号は編集されたものであることを特記しておきます。

しかし、学生部を始めとする多くの方々の努力によって省令化の要望は現実のものとなりつつあります。まだ実現されたとは言いきれませんが、希望の火は見えてきました。実現できれば、「外国人留学生指導センター紀要」として本号が最終号となります。

さて、一見して分かります様に、「紀要」と改めた第3号において、西田教授のご努力によってその様態を一新した本号は、さらに磨きを懸けて表紙をすっきりしたものにしました。今後は「外国人留学生センター紀要」として続刊する事を願います。

わずか9カ月での出版ですが、研究論文3編と研究ノート2編で内容は充実しており、指導センターがこのまま「外国人留学生センター」として昇格するにあたってなんら支障が無いことを伺わせます。特に、増倉洋子先生に

よる研究ノートの部分では、我々が留学生を受け入れた直後のその留学生の日本語能力を如何に客観的に観るかを知ることが出来、興味深いものがあります。

本号が留学生指導の参考になれば幸いです。

1995年暮（河野 功）